

人形たちの島 ● 野原亜莉子

冬の陽が部屋に伸びぬてあちこちに小さき島を作つてゐたり
 人形はまだ見ぬ島に行きたくて行きたくてまた睫毛を伏せる
 遠くまで行かうと思ふその時に鳥は翼をふいに失ふ
 着色の途中で逃げる人形よ待つて脚がひとつ足りない
 テーブルに白き手首が落ちてゐて光の方へ指を伸ばしぬ
 一言も話せぬことのもどかしく冬の羽虫の音を憎めり
 金髪がひたひの上^{うへ}に乱れたる人形が云ふ「キミも寒いのか？」
 「あたしたち、何処にだつて行けるよね」百年前から寄り添ひながら
 唇が僅かふるへて人形は生まるることの苦しさを云ふ
 人形も裸体で生まれ一月の寒き陽射しに身を晒しをり
 石膏の細かき粉は雪となり人形たちの髪を汚しぬ^{よご}
 陽の翳る僅かの時間あらはるる人形の島を遠く恋ひをり
 1mmも動かぬままで人形は恋ふことのみを赦されてゐる
 人形は胸が壊れるほど待てりたつた一日をながき一日を^{ひとひ}
 伝へたき想ひは伝へざるままに人形たちは微笑むばかり
 午後の陽のひかりのなかに現れてまた消えてゆく人形の島
 翼なく船もなければこの華奢な帽子を鳩に変へて飛ばさう
 帆を上げて船よ進めまぼろしの人形たちの王国のため
 人形の義眼がひとつ転がりて映つてゐたり青空と島
 薄いレースのカーテン越しの冬の陽があはく浮かんで消えて、落日



受賞の言葉——野原亜莉子

結婚もしないでひたすら人形なんか作つて何になるのだろうと思うことがあります。しかも、めつたに売れることもない人形たちを。第一歌集『森の母』だつて、自宅に大量に余っています。

短歌も人形も、わたしは決して上手ではありません。自分の駄目さ加減に絶望して、人生やめたくなったりします。それでも短歌を続けてこられたのは、いつも励ましてくださる東京歌会の先輩や仲間たちのおかげです。

幸綱先生、選考委員の方々、会員のみなさま、本当にありがとうございます。短歌も人形も、まだまだ夢の途中です。長年の大きな夢が叶ったので、さらに大きな夢を見ようと思います。